

田村俊子研究
—女性雑誌『女聲』を中心に—
(要約)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号 : D173091

氏 名 : 張 備 (チョウ ビ)

本研究は、日本近代文学を代表する女性作家・田村俊子（一八八四年～一九四五年）における日本・北米・中国という三つの時期の作品と言説を考察対象とするものである。俊子が本格的に文壇デビューしてから、晩年に中国において発刊した『女聲』編集にたどりつくまでの思想の変遷を論じる。なかでも、中国語の媒体であるために、詳細な研究が未だ十分には進展していない雑誌『女聲』の具体的な内容を分析することで、その誌面に託された俊子の晩年の価値観をつまびらかにすることを本論文の主眼とする。

本論文は二部構成となっており、第Ⅰ部『『女聲』以前の俊子』では、俊子がデビューしてから中国へ赴く前まで（一九一〇年十一月～一九三八年一二月）の作品と言説から見られる俊子の思想を、この時期の俊子についての評価と研究を引きながら検討している。具体的には、各年齢層、各階層の女性の問題を描いた俊子の初期作品（初期の小説）と、社会主義思想への関心を示した中期作品（中期の小説）を整理・分析し、俊子が中国へ渡る前までの思想とその背景を考察している。第Ⅱ部『『女聲』時代の俊子』では、俊子が上海で創刊した女性雑誌『女聲』を分析対象とする。雑誌『女聲』の編集の在り方、構成と内容を考察し、中国時代の俊子の思想と晩年像、そして『女聲』の性格と位置付けを明らかにしている。

第Ⅰ部『『女聲』以前の俊子』は、四章によって構成される。

第一章「俊子の初期作品における女性問題」では、先行研究を踏まえながら、俊子の初期作品及び評論、エッセイについて分析し、この時期の俊子がいかなる問題に関心を持っていたかを解明している。「女性の恋愛・結婚・家庭」、「女性のセクシュアリティ」、「女性の自立と職業」といった女性問題がテーマとされた俊子の初期作品には、家父長制度・男性中心主義を批判し、自分に強いられた女性性と義務に反抗する女性が描き出されていることを論じた。また、女性問題以外に、俊子の初期作品には下層階級、海外、植民地への関心が見られることを指摘した。

第二章「『あきらめ』論——女学生たちの行く道」では、俊子のデビュー作「あきらめ」（『大阪朝日新聞』一九一一年一月一日～三月二日）における女学生、女性の自立及び男女の対立などのテーマを見出している。そして同じく女学生を扱った同時代作品と比較しながら、「あきらめ」における当時の女性教育制度への批判を読み取った。明治期の女性教育は良妻賢母の育成を目的としていたため、女性の自立と出世は非常に困難なことである。作家志望で女学校を出た「あきらめ」の主人公である富枝もこのような困難に遭遇し、故郷の岐阜に帰ることになる。この結末は、富枝の挫折と読み取れる一方で、義兄の支配から脱出して自力で再び出発するための作戦としても把握できることを論じた。

第三章「俊子の思想の転換期・カナダ時代」では、カナダへ渡ってから中国渡航前まで（一九三六年三月～一九三八年一二月）の時期に、俊子が『大陸日報』と『新世界』で発表した論説を考察した。この時期の俊子の評論で論じられた女性の自立と職業、教育、修養といったテーマは彼女がカナダ以前から関心を持ち続けてきた問題である。しかし、女性解放運動、婦人会の設立、移民と排日の問題への関心は、俊子がこの時期に獲得した新しい視点だと考えられる。先行研究ではこれらの新しい視点の獲得を、この時期の俊子の共産主義思想

への傾斜の証拠として受け入れている。しかし、暴力による手段より「人格の力」、「強い意志」、「智識」など非暴力の手段を提唱する俊子は、単純に共産主義者として規定、認識するにはやや逸脱している点も見られることを論じた。

第四章「文壇への再帰——「カリホルニア物語」「残されたるもの」を例として」では、俊子が北米から日本へ帰国した後に発表した小説「カリホルニア物語」（『中央公論』一九三八年七月）と「残されたるもの」（『中央公論』一九三七年九月）を例に、俊子がカナダで獲得した人種・階級・日系移民などの新しい視点をどのように小説に取り入れたのかを論じた。また、帰国後に俊子が書いた小説の不評の要因として、日系移民、労働者および労働運動への理解が不十分であることを指摘した。

第Ⅱ部『女聲』時期の俊子」は、五章によって構成される。

第五章「雑誌『女聲』の概要及び特徴」では、俊子が上海で創刊した雑誌『女聲』に関するこれまでの先行研究と雑誌の主旨・構成・内容を整理している。まず先行研究について、日本における『女聲』の研究は『女聲』の内容と情報を紹介する段階を経て、近年ではようやく雑誌の内容の分析に辿り着いたところである。一方、中国において、『女聲』は長い間にわたってプロパガンダ雑誌と見なされていたため、研究成果は少ない。『女聲』の誌面構成と執筆陣への考察を通して、『女聲』の総合雑誌としての側面を確認するとともに、戦時下の上海において休刊を挟まずに『女聲』を発行し続けた、編集者・俊子のはたらきについて明らかにしている。

第六章『女聲』における日本人作家たち」では、後期の『女聲』が日本の文学作品を紹介し始めた理由や、選ばれた作家たちが『女聲』とどのような関係を持つのかを論じている。後期『女聲』で日本の文学作品が紹介され始めたことには、大東亜文学者大会の開催と女聲社の人事変動が関わっていることを述べた。特に「児童欄」の編集者が女聲社から離れたために、豊島与志雄と宮沢賢治の童話がその「児童欄」の空白を補う役割を果たしていたことを明らかにした。

また、雑誌掲載に選ばれた日本人作家たちの大半は大東亜文学者大会の関係者であるが、『女聲』掲載の彼らの作品は単純に大東亜共栄を主張するものではなかった。たとえば、日本軍の様子を描いた火野葦平の小説「怪談宋公館」は、大東亜戦争と日本軍の勇気を謳歌する小説として読まれる一方で、占領地における日本軍の自律の必要性を強調し、戦争や占領地統治への不安による日本軍の心の揺らぎを暴く小説としても読むことができる。豊島与志雄と宮沢賢治の童話はさらに大東亜共栄の思想とは無縁なものであった。こうした小説が掲載されていることで、『女聲』のプロパガンダ雑誌としての性格は一層稀薄なものになった。ただし、「怪談宋公館」は戦争遂行などの軍国主義思想を仄めかす小説だということも事実である。すなわち、俊子が選んだ日本文学作品は必ずしも当時の政治と関連のない作品ばかりだったというわけではなく、俊子の日本軍部と軍国主義への妥協のあらわれであると把握することができる。

第七章『女聲』における中国共産党地下党员」では、中国共産党地下党员たちと『女聲』の関係に注目した。特に中国共産党地下党员である丁景唐の投稿を考察し、俊子が執筆者と掲載内容を選択する際の基準、共産主義思想に対する態度を検証している。これまでの先行研究では、『女聲』における中国共産党地下党员の投稿を関露と結び付けて論じられることが多かった。しかし、ここでは関露よりも俊子自身が地下党员たちの投稿を『女聲』に取り入れたと考えるほうが適切であることを編集上の在り方から述べた。俊子は地下党员たちに直接協力しているわけではないが、『女聲』のような雑誌を作ることで間接的に地下党员たちに公に発信できる場を提供した、というのが導かれた結論である。

第八章「信箱」欄と俊子」では、『女聲』の読者交流欄に当たる「信箱」欄での読者の投稿と編集者による回答を分析し、中国時代の俊子は女性問題に対してどのような主張を持っていたか、そして俊子が当時の中国女性にどのようなメッセージを伝えようとしたかを論じた。「信箱」の投稿内容は、恋愛結婚、自立と就職、勉学に関する相談が一番多く、カナダ以前の俊子が関心を持っていた女性問題と重なっている。中国時代の俊子はこのような形で自身の女性解放思想を中国女性たちに発信し続けた。一方、読者たちは「信箱」欄を通して自分の悩みを訴え、他の女性たちと意見を交換し、確認し合っている。「信箱」欄を設立することで、『女聲』の「女性からの声」という主旨がまさに実現されたと言える。

第九章『女聲』における婦人論」では、『女聲』掲載の婦人論を分析の対象とし、その内容と俊子自身の主張との異同を調べ、中国時代の俊子の思想と編集姿勢を明らかにした。また、一九三〇年代の中国で話題となっていた女性問題が、『女聲』でどのように論じられていたのかを検証し、『女聲』の位置付け及び中国女性に与えた影響を解明した。『女聲』における「婦女回家」・「良妻賢母」などの女性問題についての議論は、一九三〇年代の議論との大きな差異が確認できず、停滞していると言える。また、『女聲』には保守派と革新派両方の意見が混在しているため、『婦女生活』、『女子月刊』などの革新派（または急進派）の雑誌と比べると、進歩的な雑誌とは言えない。ただし、他の女性雑誌より多角的な視点を読者に提示しうる媒体であったと位置づけた。